

能登半島地震、奥能登豪雨の後、能登で生業を営む方から、「能登を忘れないでほしい」、「能登にたくさんの人に来てもらいたい」とのお話を伺いました。今の能登を、全国の方々に知っていただきたいという想いから、取材させていただきました。

能登半島地震から1年が経ち、全国の皆さまから温かいご支援をいただき、能登は一步步、着実に復興に向けて歩み始めています。まちづくりに向けて、これから多くの課題と向き合うことになり、真の復興を果たすためには、長い時間を要することになります。

まちを再生するには何が大切か、能登の方々に教えていただきました。仲間と支え合い、信念と覚悟を持ち、決して諦めずにチャレンジを続けていくこと。地域に宿る資産を知恵とアイデアで価値に変えていくこと。

能登の今、そして未来に向けたビジョンを通して、ココロで感じ、能登と皆さまの地域を考えるきっかけになれば幸いです。ココロとココロを通わすことができれば、能登に必ず明るい光が差し込むと信じています。

HEART TO NOTO

ココロと
ココロが
つながる

あなたの声を 能登に届けませんか？

能登への応援メッセージや感想コメントを募集いたします。
“HEART TO NOTO” が、能登と全国の各地域をつなぎ、
未来を共に育んでいくきっかけとなれば幸いです。

能登の皆さまへ
伝えたいこと

記事を読んで
感じたこと

これから取り組みたいと
考えたこと

復興、まちづくりに対する
想いや考え

いただいたメッセージは、インタビューにご協力いただいた方や能登の関係機関の方へ届けます。
皆さまからのメッセージは、能登の方々にとって、ココロとココロをつなぐ大きな力となるはずです。たくさんのご応募をお待ちしております。

応募方法

右記二次元コードからメッセージをお寄せください。
応募期限：令和7年7月31日(木)



表紙写真：坂本 藍(2024)



あの日から、1年。

— 生業で能登を切り拓く人が語る、今とこれから —

共に歩む地元金融機関が描く未来

商工会の組織力を生かした復興支援

復興を支えるコミュニティ作りと生業作り

たくましさと、 しなやかさで、 未来を拓く。

能登半島地震から、1年。

能登には今もなお、がれきが積みあがり、
震災の爪痕が残ったままだ。

しかし、前を向き走り続ける人がいる。
能登で、再び生業を建て直すために。

「それでも、能登で、やりたいことがある。」

能登の未来を信じて、
強い決意を胸に奔走する姿。
それこそが、この地が進むべき確かな道を指し示している。



あの日から、1年。

— 能登の今と、これから —



持続可能な農村をつくるために——。
被災前からの奥能登の課題を
復興と一緒に解決していく。

こめとわとベーグル
のと栄能ファーム 代表

山下 祐介さん

金沢市出身。金沢大学大学院法務研究科卒業。2016年、祖父母の守ってきた土地と農業を継ぐため輪島市に移住・就農。試行錯誤を繰り返し、自身のブランド「金蔵米蔵金(かなくらまいぞうさん)」を生産。2023年7月、海を一望できる高台に、米粉100%を使用したベーグルカフェ「こめとわとベーグル」を開業。

— 輪島で創業

奥能登の棚田の景色が大好きだった

輪島市町野町の金蔵地区は、丘陵に棚田が広がるのどかな集落です。私は金沢生まれ金沢育ちですが、季節になると金蔵の祖父母を訪れ、田植えや稲刈りを手伝っていました。転機が訪れたのは、大学院を卒業し司法試験に向け勉強していたときです。祖父が体調を崩し、もう田んぼはできない状況になりました。近隣の農家に耕作を託す選択肢もありましたが、高齢化が進む中、10年後もこの地で同じように農業が続いている未来は想像できませんでした。棚田の景色が大好きだった私は「それなら自分がやろう」と決め、2016年に金蔵に移住、就農しました。

何の知識もないところからのスタートです。最初の一年は試行錯誤の連続でしたが、一連の作業を経験し、なんとか収穫に漕ぎ着けたことで自信ができました。以降は離農する人の田を受け継ぐかたちで少しずつ耕作面積を増やし、金蔵産米のブランド化に取り組みました。

また新たな商品展開を考える中で着目したのが米粉ベーグルです。約2年かけてレシピを完成させ、製粉機を導入し、2023年7月に米粉ベーグル専門店「こめとわとベーグル」を開業しました。

— 地震と豪雨

田んぼとベーグル店が被災

海を見渡す高台にある店舗は金沢や県外からもお客様が訪れ盛況でしたが、オープン半年後に能登半島地震が起きました。

店舗内外に被害を受けるとともに、農機を格納していた作業所も全壊。用水路やため池も損壊しました。それでも前を向き、もう一度やろうと限られた田んぼで田植えをし、いよいよ収穫というとき、今度は豪雨が奥能登を襲いました。金蔵では近くを流れる川が氾濫して稲が冠水し、「地震よりひどい」「もう心が折れた」という声も聞こえてきました。



刈取り風景



こめとわとベーグル

— 今の状況と動き

輪島をワクワクできるまちへ

店舗は床に亀裂が入り、イートインスペースが少し下がっています。また近隣に土砂崩れが発生し、復旧工事に向けた調査を待っている状態です。営業再開の見通しは立っていませんが、幸いなことに厨房は比較的影響が少なく、機械を修理すればベーグルの製造はできる状況です。イベントへの出店は可能ですし、キッチンカーの導入も検討しています。地震前、小麦アレルギーの子どもに食べさせたいと店に通ってくれていた方から、「米粉100%はこの店だけ、必ず再開してほしい」とメールをもらったことが、事業再開の原動力になっています。

私の田んぼでは2025年の作付けは諦めましたが、市内の農家仲間と協力し、輪島産のお米でベーグルを作って冷凍の状態ですべてに販売する計画を練っています。奥能登を発信するベーグルだということは、これからも変わりません。

一方で、ひとりの農家、一軒の店の力だけでは農村のコミュニティを再生することはできません。地震後の2月、今こそ自分たちがワクワクできるまちづくりを始めようと地元有志で立ち上げたのが「町野復興プロジェクト実行委員会」です。みんなで笑える日を取り戻す花見大会を皮切りに、地域を元気にするイベントを次々と開催しました。豪雨後は一日も早く地域の風景を取り戻そうと、復興支援ボランティアの受け入れを行って



ます。ひとりは無力でも、集まれば大きな力が生まれることを肌で感じています。

— 復興に向けた決意と展望

未曾有の災害を、奥能登が変わる契機に

自分自身の被害も甚大ですが、今考えるべきは「奥能登の農業をどうするか」です。今回の地震や豪雨は決して起きてほしくないことでした。ただ起きてしまったのであれば、奥能登を大きく変えるきっかけにしたい。奥能登の農業は、震災前から高齢化や過疎化などの課題が表面化していました。画一的に災害以前の状態に戻すのではなく、限られた予算や人員を効率的に使って10年先、20年先も続けられる農業のかたちを実現すべきです。農家も市民も行政も目指すところは同じ。「誰かがやってくれる」「もう決まったことだから」ではなく、関わるすべての人がそれぞれの立場で考え、対話し、その積み上げから結論を出すプロセスも重要です。

能登の農地が整備されるまで、まだまだ時間がかかります。全国の皆さんにお願いしたいのは、能登の存在を忘れず、「能登の今」を、ずっと気にかけてほしいということです。そして小さなことでもいいので、ご自身ができること、得意なことで、能登の復興に協力してほしいと思っています。

こめとわとベーグル

石川県輪島市大野町城兼37-69

のと栄能ファーム

石川県輪島市町野町金蔵3部246番甲地

Instagram



ホームページ



あの日から、1年。

— 能登の今と、これからと —

地震に負けず、人生の目標へ——。
『のとジン』を、
能登人の希望にするために。

能登人 NOTOGIN®NTG 代表
松田 行正さん

広島県出身。都内のIT企業への勤務を経て、2020年より「のとジン」開発をスタート。「能登里山里海SDGsマイスタープログラム」に参加。2021年、珠洲市に移住。2022年、能登産のポタニカルを使用したクラフトジン「のとジン」を創業。2023年、「The Gin Masters 2023 Asia」にて金賞を受賞。



— 珠洲で創業

ジンを通じて能登を発信したい

もともと蒸留酒が好きで、いつか自分のジンの蒸留所を持ちたいと考えていました。実行に移すきっかけになったのは、東京のIT企業に勤めていた2020年、ラジオ番組を通じて石川県の能登で育つ能登ヒバの存在を偶然知ったことです。能登ヒバの爽やかな香りをジンに活かすと面白いのではないかとひらめき、金沢大学が奥能登の自治体と協力して実施する社会人講座「能登里山里海SDGsマイスタープログラム」に参加しました。

2021年春には珠洲市に移住し、本業をリモートでこなしながら副業でクラフトジン事業の準備を進めることになりました。小松空港に降り立ち、車で奥能登へ向かう中、里山里海の美しい風景が次々と現れるのに心を打たれたことを覚えています。

その後、プログラムを通じて能登の里山里海の資源について学び、地元のおさまな方と交流を深める中で、

この豊かな自然や人々の営みを次世代に残していかなければと思うようになり、「能登の資源を使ってジンをつくる」という当初のアイデアは、「ジンを通じて能登を発信する」という情熱へと変わっていきました。

— 地震を受けて

奇跡的に無事だった『のとジン』

ジンの個性を決めるのは「ポタニカル」と呼ばれる植物素材です。当初考えていた能登ヒバは香りが強すぎるため外しましたが、地元の方の話を聞きながら、使い道のないユズやカヤの実、間伐作業の副産物として出る月桂樹や黒文字の枝などを選定しました。ジンのOEM生産を行うイギリスの蒸留所と協力して試作を重ねて『のとジン』のレシピが完成、2022年春から販売を開始しました。

『のとジン』が国内・海外の品評会で金賞を受賞、能登産の素材を使った炭酸飲料『のトニック®』も完成し、事業が順調に伸びる中で発生したのが、2024年1月1日の能登



珠洲で採取するゆずの実



『のとジン 願い星』をはじめとした商品

半島地震です。海に近い事務所兼自宅は若干傾いてタイルが剥がれ落ち、すぐ近くまで津波が押し寄せた跡がありました。ただボトルの入ったカートンを平積みしていたことが功を奏し、ジンの在庫は奇跡的にすべて無事でした。

— 震災後の生業の軌跡

全国で「飲んで応援」の輪が広がる

震災直後は道路が寸断し商品の出荷ができないばかりか、断水で日常生活もままなりません。そんな中、「のとジンを飲んで能登を応援しよう」という動きが全国のバーや飲食店で起こり、多くの注文とエールが寄せられました。応援の声に応えようと、隣の配送センターに商品を選び込むかたちで1月7日から出荷を再開しました。半年分と見込んでいた1,000本の在庫は2月中旬に完売。『のとジン』の売上の一部を被災地支援に回してくれた店舗もありましたし、私も売上の中から奥能登の自治体に継続して寄付しています。

復興への願いを込め、能登町の特産品・ブルーベリーの農園で出る剪定枝や、珠洲市の良質な天然わかめなどをポタニカルとして使った新商品「のとジン 願い星」も開発しました。

地震の揺れで木が倒れてしまった、道路が崩れて収穫地までたどり着けないなど、能登産ポタニカルの確保は見通

しが立ちにくい状況です。地震前に採取し乾燥させた分もありますが、残りわずかです。課題は少なくありませんが、地域の方から「あなたが営業を続けていることに勇気をもたらしている」という温かい言葉をもらい、『のとジン』を続けていきたいという自分の意志を再確認しています。

— 事業の継続に向けて

置かれた状況で最適解を選択

現在蒸留所は千葉県にあり、能登に自分の蒸留所を構える夢がありましたが、9月の豪雨により、珠洲市を含む奥能登全域で再び断水が発生しました。ジンの蒸留工程には大量の水の安定供給が欠かせないことを考えると、珠洲の地に蒸留所を持つことは難しいと判断せざるを得ませんでした。

どれだけ備えていても自然災害は起こります。生業を継続するためには、その時々々の外部環境の変化に対応し、最適解を選択していくしかないと考えています。今後は富山に蒸留所を設置することを視野に入れながら、珠洲と富山の2拠点体制で営業を展開していく予定です。『のとジン』の事業を継続し、能登の里山里海を全国に発信し続けることが、能登への恩返しとして、また能登復興に向けて自分がやるべきことだと思っています。



Instagram



能登人 NOTOGIN®NTG

石川県珠洲市上戸町北方2-152-1 道下ビル3階

あの日から、1年。

— 能登の今と、これからと —



食で能登を元気にする。
夢を諦めないのは、
このまちが好きだから。

一本杉川嶋 店主
川嶋 享さん

七尾市出身。エコール辻大阪を首席で卒業。大阪・京都の日本料理の名店にて修行を積み重ね、和倉温泉の旅館にて料理長を歴任した後、2020年「一本杉川嶋」を開業。開業わずか1年未満にてミシュラン一つ星、グリーンスター獲得。2024年、ゴ・エ・ミヨ2024にて「明日のグランシェフ賞」受賞。同年、The Japan Times Destination Restaurants受賞。超予約困難店。

— 七尾で創業

“ふるさと愛”から生まれた日本料理店

七尾市の老舗旅館の総料理長だった父の影響で料理人を志すようになり、大阪や京都の名店を渡り歩いて腕を磨きました。食の力でまちを元気にしたいとUターンし、独立創業の地として選んだのが一本杉通りです。600年の歴史と伝統がある商店街であり、私にとっては祖父の家が近くにあり、小さい頃によく遊んだ場所でもあります。

建物は1932年頃に建てられた国登録有形文化財で、地域のシンボリックな存在でした。開業に向けて絶好のタイミングで購入できたことで、歴史ある建物を受け継いで次世代に残していくことが自分の使命のように感じました。店名に「一本杉」と入れたのは、この地域を銀座や祇園のようなブランドにしたかったからです。

能登は海も山も川も近く、食材に恵まれています。一流の食材を見てきた自信があった私ですが、能登にはもっとすごい食材がごろごろあります。正直、驚きました。

開業前も今も、生産者さんのもとに通い、どんな場所で、どんな人が、どんな思いで仕事をしているのかを確かめています。生産の苦労や情熱を知ると料理人として妥協は一切できませんし、料理のインスピレーションを得ることもあります。

— 震災後の動き

できることをする、仲間と一緒に

店の客層は地元が3割、中距離が3割、海外を含む県外が4割で、オープンから間もなく1年先まで予約が埋まるようになりました。来店を機に能登観光を楽しんでもらおうと、隣接する空き家を宿泊施設に改修する工事を進めていたさなかに、あの地震が起きました。

一本杉通りでは古い建物が軒並み被害を受けました。一本杉川嶋も同様で、外壁が剥がれ、壁にひびが入り、さらには、柱が折れ、建物自体に傾きや捻じれが生じることとなりました。隣の宿泊施設は倒壊の恐れがあり、



震災から1か月の店舗



共に炊き出しを行った料理人仲間



小学校での出張授業

その後解体となりました。

悲惨な状況でしたが、それでも自分にできることを考え、県内の料理人仲間呼びかけて1月3日から避難所で炊き出しを始めました。温かいスープを提供すると涙を流して喜んでくれる方も。そんな姿を見て、人々に安心や生きる希望を与える食の本質的な力を実感しました。

約3か月にわたって炊き出しを継続できたのは、食材を提供してくれた生産者さんに加え、たくさんの料理人仲間や団体、ボランティアの方々の支えがあったからです。これまで携わってきた方々との繋がりを強く感じる瞬間でもありました。自分自身も被災者でしたが、仲間と一緒に炊き出しに向き合うことで救われた面もあります。この厳しい状況をチャンスに変えていきたい、いや変えるしかない、行動を起こす原動力にもなりました。

— この場所で生業を続ける理由

このまちが好き、このまちの人が好き

店舗は修復にあたって文化庁との協議が必要で、1年経った今もシートで覆われたままです。開業時の借金を抱えて休業を余儀なくされ、不安に押しつぶされそうになることもあります。しかし一本杉川嶋は、絶対にこの場所で復活します。そのとき自分の店だけ復活しても意味はありません。七尾の復興、奥能登の復興のためには、一本杉通りが活気を取り戻す必要があります。

私には以前から、一本杉通りをいろんなジャンルの



お店が集まる食のストリートにするという夢があります。賛同する方を集め、2022年から毎年開催している食のフェスタ「うまさぎ一本杉」は、震災後も継続しています。震災で空き家になった店舗前の3軒の古民家を購入し、それぞれアンテナショップ兼レストラン、セントラルシェアキッチン、宿泊施設として活用し、いろんな人にいろんなかたちで能登に関わりを持ってもらえるプロジェクトも進めています。私はこのまちが好き、このまちの人が好きなんです。そこに踏み張り続ける理由があります。

— 復興に向けた決意と展望

食から地域の未来を創る

環境は一変しましたが、食の力でまちを元気にするという軸はブレていません。食はあらゆる産業の出口になります。雇用を生み、地域経済を循環させ、若い人を呼び込みます。能登は料理を学びたい人にとって理想的な場所ですから、若い料理人にぜひ修行にきてもらいたいと思っています。

地震前から力を入れている食育活動も継続し、小学校で出張授業などを行っています。子どもたちが食の背景にある能登の魅力を知れば、一度外に出てもいつか能登に戻ってきてくれ、地域の未来は変わります。

今はまだ皆さん、明るい未来を想像しにくいかもしれませんが、でも諦めなければ、時間がかかっても必ず良い方向に進んでいく。そう信じています。

一本杉川嶋
石川県七尾市一本杉町32-1

Instagram



生業を支える。心を支える。 今こそ、「相互扶助」の信用金庫が存在意義を発揮するとき。

のと共栄信用金庫 理事長 鈴木 正俊さん

のと共栄信用金庫(のとしん)は七尾市に本店を構え、能登・金沢地域を事業区域としています。2024年の地震と豪雨では多くの取引先が被害を受けました。我々はお客様の声を聞き、各方面に実情を伝え、必要なら陳情を行ってきました。現時点で奥能登を中心に営業を再開できていないお客様もありますが、廃業率は3%と、全国平均と同等程度に踏みとどまっています。

当金庫の取引先の多くは宿泊業や飲食業であることから、事業再開を支援する中でコロナ融資の返済との二重債務が問題になりました。事業を継続してもらうには債権のカットが欠かせないと考え、2024年3月に官民連携で100億円規模の復興支援ファンドを創設し、既存債権を買い取る仕組みを用意しました。債権カットにより当



金庫にも相応の負担が生じます。能登の人は皆さん優しく、「のとしんに悪い」とファンドの利用をためらう方もいますが、どんどん使っていただきたい。今こそ相互扶助を理念とする信金が存在意義を発揮するときです。

「なりわい再建支援補助金」の申請支援にも力を入れています。被害の度合いや再建方法は事業

者ごとに異なるため、書類の作成が足かせとなっています。今後の課題として県や商工会等との連携、建設業者との意思疎通をはかっていく必要があります。全国の信金にも地震直後からさまざまな支援をいただいています。47都道府県のコメを集めて醸される日本酒「絆舞」もそのひとつ。地域のお客様との絆だけでなく、信金同士の絆も実感しています。

自然災害は年々増えています。能登が身をもって経験した「被災した際にどんな公的支援が受けられるか」といった情報はパッケージ化し、全国で共有すべきだと考えています。それが被災者の安心や生業の再生のスピードアップにつながります。

和倉温泉については、早期復旧を訴えたことで国主導で護岸復旧工事が始まり、2025年度には当金庫の取引先も含め半分以上の旅館・ホテルが営業を再開します。元通りの姿に戻すのではなく、持続可能な観光に向け、新たな価値を生み出す必要もあるでしょう。これからの道のりは長期戦になります。我々もアイデアを出し、最後まで地域に責任を持って、金融機関としての使命を果たしていきたいと考えています。

のと共栄信用金庫では、能登でがんばる企業やお店を紹介する「能登半島応援ページ」を開設するなど、能登復興に向け、地域と共に歩んでまいります。

応援ページ



のと共栄信用金庫
石川県七尾市松物町35番地

地元金融機関が

共に歩む 描く未来

小さくても輝く奥能登の事業者たち。 「外から稼ぐ力」に磨きをかけ、地域の経済循環を促していく。

奥能信用金庫 理事長 田代 克弘さん

能登半島地震から瞬く間に濃密な1年が過ぎました。自らも被災しながらも、お客様の生活や生業の再建に懸命に取り組んでいる職員たち。さまざまな支援を通じて復興を後押ししてくれる全国の信金の仲間たち。今、胸にあるのは「感謝」の気持ちです。

奥能信用金庫は地震の被害が大きかった奥能登2市2町を地盤としています。取引先の店舗や工場の多くが被災し、事業の再開をすることができない厳しい状況が続きました。私たちは発災直後から取引先を訪ねて状況を聞き取り、行政官庁に被災地の声を届け、支援策への反映を働きかけました。特に外部機関と連携する場面が増えたことで業務のグラデーションが濃くなり、金融機関としての役割を発揮することができたと感じています。

現在は9割の取引先が何らかのかたちで事業を再開しています。ただ復興が遅れ、さらに人口流出が進めば、先が見通せず事業再建を諦める方、後継者がいないことで廃業する方も増えるでしょう。それぞれの事業規模や状況、復旧・復興のフェーズに合わせた伴走支援を行っていく必要があります。

奥能登には従来、一次産品をはじめ、輪島塗、輪島朝市、日本酒、塩など、地域外からお金を稼ぐことができる資源があります。震災前の2020年は、地域内総生産額の約28%が地域外からの消費でした。石川県全体の割合は約7%ですから、いかに奥能登の「外から稼ぐ力」が強いか分かります。奥能登復興の柱になるのは、この「外から稼ぐ力」です。魅力ある商品やサービスの価値をさ

らに高めるとともに、地域外から稼いだお金を地域内で循環させる仕組みをつくることも欠かせません。



過去に大きな地震を乗り越えてきた地域の経過を調べると、復旧・復興のピークは発災から3~4年後となっています。すなわち、奥能登はいまだ復旧段階にあるものの、これから地域の生産性や経済価値を生み出すための磨き上げの時期に入っていくのです。カギになるのは新しい人の流れです。当金庫では国の休眠預金活用制度を利用し、地元事業者と外部の副業人材、専門人材をマッチングする事業をスタートさせています。

昨年12月には、復興支援の業務協力について、のと共栄信用金庫と覚書を締結しました。お互いが強みを発揮し、「奥能登があり和倉がある、和倉があり奥能登がある」といわれるような共創のかたちを生み出していきます。

奥能信用金庫では、能登地域の皆さまと共に一日でも早い復旧復興に向け、地域や被災事業者の皆さまの支援に取り組んでまいります。

ホームページ



奥能信用金庫
石川県鳳珠郡能登町宇出津ム字
45番の1地

事業者の再建を後押しし地域のコミュニティ機能を取り戻していく。



能登町商工会

事務局長 諸角 一也さん
経営指導員 泉 泰之さん

能登町商工会

石川県鳳珠郡能登町宇出津
ヲ字1番地12



能登町は能登半島地震で甚大な被害を受けました。商工会の職員も被災し、11名の職員のうち事務所に出てこれたのは当初3名だけでした。断水が3月末、場所によっては5月まで続いたこともあり、商工会の会員の中ではこれまでに37の事業所が廃業しました。事業を再開したといっても、従業員が辞めたり機械の一部が損壊したりといった理由で、時短営業をしているケースも少なくありません。

生活に欠かせない商品やサービスを提供する事業者の再建を後押しすることは、地域のコミュニティ機能を回復させることにつながります。商工会では事業者の切実な相談に耳を傾け、補助金の申請作業をサポートしています。「小規模事業者持続化補助金(災害支援枠)」は約100件が申請されています。ただ採択が決まっても業者や資材が確保できず、やむなく取り下げられることもあります。「なりわい再建支援補助金」は現状27件の交付申請にとどまっていますが、今後100件程度に伸びる見通しです。2025年春には仮設商店街もオープンします。会員のお店や工場を元に戻すことが、我々の最優先の目標です。

商工会では震災以前から行政、信用金庫などと座組を組んでいたことから、発災時もスムーズに情報共有ができ、復旧のスピードアップにつながりました。ありがたかったのは、全国の商工会から交代で経営指導員が応援に来てくれたことです。過去に震災を経験した地域の指導員からは緊急時の対応のアドバイスをもらえました。

能登町宇出津といえば夏のキリコ祭り「あばれ祭り」が有名です。震災後の開催は賛否が分かれていましたが、若い人たちが声を上げ、開催に至りました。結果「やってよかった」という声が多く、住民や事業者の団結力向上につながり、復興に向かう力が醸成されたと感じています。

能登は祭りと魚、そして人の好きが何よりの資産です。「あばれ祭り」のほか、毎年1月には「寒ぶりまつり」も開催されます。ぜひ全国から能登へお越しください。

奥能登を「二地域居住」の先進地にしたい。



合同会社 C と H
共同創業者・CEO
伊藤 紗恵さん



HARIO社と協業し、
ガラスアクセサリを制作

合同会社CとH

石川県珠洲市飯田町15-20-1



私は東京生まれ東京育ちですが、子どもの頃は夏休みになると母方の実家がある珠洲市を訪れていました。そんな珠洲市に移住し、会社を創業して、コワーキングスペース兼交流拠点「OKNO to Bridge」(奥能登ブリッジ)の運営を始めたのは2023年5月のことです。東京時代のネットワークを活かし、地元の人材はもちろん、首都圏から若者や“面白い大人”を呼び込み、新たなビジネスや働き方を生み出そうと活動していましたが、地震で建物が全壊。いったん金沢に拠点を移しましたが、6月に珠洲市に戻って活動を再開し、奥能登復興を支えるコミュニティ作りを力を入れています。現在は、珠洲・金沢・高岡の3拠点を運営しています。

現在進めている取り組みのひとつが女性のキャリア作りです。奥能登では女性の仕事の選択肢が少ないという課題が以前からあり、加えて今は避難先と奥能登のどちらで暮らしていくかで人々の心が揺れています。働き方の選択肢が増えれば、女性が能登に残る、戻る、関わり続ける可能性が広がります。

大学のない能登に学生を呼び込むため、若い世代が自らの力を試し、地域課題を解決していくインターンシップも積極的に行っています。拠点での交流や学びをきっかけに、能登での起業を決めた若者も複数います。

古民家暮らしは地方移住の大きな魅力ですが、地震で多くの建物が倒壊した奥能登では、今後古民家を確保することは難しいでしょう。私はそんな奥能登を、都市部に住みつつ定期的に地域に滞在し、仕事や地域活動を行う「二地域居住」の先進地にしたいと考えています。すでに拠点近くに建物を借り、中長期滞在できる施設のオープンを目指しています。人口が減少する日本で、奥能登は新たなキャリアを生み出し、ワクワクする未来をつくる場として大きな可能性を秘めています。

能登では人、資金、ノウハウなどのリソースを求めています。知見を共有してくれる方、協業のアイデアをお持ちの方、仕事を発注してくれる方に興味を持っていただけると嬉しいです。

能登復興の支援施策

能登のために できること



応援消費したい!

石川県応援カタログ (第1弾～第3弾)

石川県の事業者さまの企業情報や商品・サービスを掲載したカタログです。



JFC 日本政策金融公庫

能登のために、石川のために 応援消費おねがいプロジェクト

「できることから、できるかたちで能登を応援!」をテーマに、買い物や食事、観光など、能登の応援につながる情報を紹介しています。

石川県



ふるさと納税したい!

令和6年(2024年) 能登半島地震に係る寄附

石川県では、ふるさと納税制度を活用した災害支援寄附を受け付けています(返礼品なし)。お申込みの際はふるさと納税専門サイト等をご確認ください。



石川県

義援金を贈りたい!

令和6年(2024年) 能登半島地震に係る災害義援金

石川県では、日本赤十字社石川県支部及び石川県共同募金会と連携し、義援金を受け付けています。

受付期間: 令和6(2024)年1月4日(木)
~令和7(2025)年12月26日(金)



石川県

担い手になりたい!

石川県後継者募集プロジェクト

石川県の事業を次世代につなぐため、後継者の募集を検討している方、事業を引き継いでスタートしたい方を支援機関の皆さまと連携してサポートします。

本特設ページでは、石川県内で後継者を募集している事業者の情報や各支援機関の取組み、石川県内の成約事例などを紹介しています。



JFC 日本政策金融公庫



移住したい!

いしかわ暮らし情報ひろば

石川県へUターン・移住したい人のためのポータルサイト。

移住をうまく進めるためのポイントや石川の暮らし、地域事業などを紹介しています。



石川県



取引したい!

令和6年 能登半島地震 復旧・復興マッチングサイト

被災企業・地域の復旧・復興ニーズと、全国の大手企業、中小企業をつなぐマッチングサイトです。企業マッチングに精通する中小機構の販路開拓支援アドバイザーが商談成約、事業再開までをサポートします。



Be a Great Small.
中小機構

